

## 文学作品からみた「金沢」の場所イメージ

## The Place Image on Kanazawa in Novels

長 江 憲 暁

## I. はじめに

文学作品が地理学の研究対象としてとりあげられるようになって久しい。内田 (1989, p.495) はこれらの研究を概観して, (1) 特定の作品や特定の作家の作品群に描かれた場所のイメージの復元 (例えば, Aiken, 1977 ; 1981 ; MacManis, 1978 ; Prince, 1981 ; Tuan, 1985 ; Alexander, 1986 ; 青山, 1985 ; 福田, 1991など), (2) ある特定の場所を舞台にした作品群を通してみた場所イメージの再現 (例えば, Pocock, 1979 ; 内田, 1989) とに分類しているが, それ以外にも杉浦 (1992) のように, (3) 文学作品に描かれた地理的空間の解説, といった業績もみられる。こうした研究は, 人文主義とよばれる潮流のなかでなされてきたが, このうちとくに (2) に類する研究, すなわちある特定の場所 (都市など) の場所イメージをあきらかにしようとする研究は, 場所のアイデンティティを明らかにすることによって, 都市計画や都市政策の分野にその成果が求められることにもなるだろう。

文学作品を分析の対象としている工学系 (都市計画系) の論考の諸成果をみると, 例えば小林 (1984, 1988) は, 雨景表現や音についての人間一般の感じ方を, 語の抽出とその語の分類・整理という方法でもって明らかにしている。同様に, 若山・藤原 (1989)・若山 (1990)・黒岩・前川 (1990 a, b)・香西 (1994) などまた, 文学を小説のみならず, 詩歌・和歌・古典文学など広範囲に扱い, 設計の方法やデザインの妥当性を探りながら, したがって人間一般, あるいは日本人一般の環境に対する感じ方

を捉えようとしている。

しかし, ここで詳細に検討することはしないが, 近年の都市政策, 殊に景観行政とよばれるもののなかで求められているものは, これら人間一般の感じ方といった快適な都市づくりの規範や根拠を示すことのみにとどまらず, 都市それぞれがもつはずの独自性を明らかにすることであるように思われる。このことはいいかえれば, その都市の独自性というのが, 快適な都市をつくりだすひとつの鍵として考えられるようになってきたともいえるだろう。このため筆者は, 景観行政が全国の各市町村で展開されている現状<sup>1)</sup>を鑑みるに, 上述した場所イメージをあきらかにする研究が, 早急に様々な都市レベルで行われることが求められるであろうと考える。

本稿でとりあげた金沢では, 全国にさがけて1968年金沢市伝統環境保存条例が制定されたが, それは経済成長にともなって破壊されてきた金沢という都市のもつ独自性を守ろうとした最初の動きであった。それ以降この動きは様々な展開をみせるが<sup>2)</sup>, 1989年それを発展解消させるかたちで「金沢市における伝統環境の保存および美しい景観の形成に関する条例」(いわゆる金沢市景観条例)が制定される。これらの条例制定をめぐる論考は中村・川上 (1994) に詳しいが, 1993年景観都市宣言が市議会に議決されるなど, 金沢市内の町並みを修景・保存していくことで金沢の独自性を守ろうとする動きは, 現在もさかんである。

本稿は, このような動きを背景に, 文学作品を分析対象として金沢の場所イメージをあきらかにする

ことを目的とするが、そのために、金沢のどのような部分が「場所」として認識され、またそれらの場所に付与されたイメージがどのようなものであるのかを、その時代変遷を追うことによって明らかにしてみたい。

## II. 研究方法と分析対象

本来個人的な営為で還元されるはずのイメージを、その具現化を目的とする都市政策に介在させようとするとき、できるだけ多くの人々のイメージがくみ取られなければならない。したがって、ここでの分析の第一条件としても、できるだけ多くの主観によって描かれた「金沢」をその分析の対象として取り上げることが妥当である。本稿では、第1表に挙げた34名の小説家の作品のうち、金沢が描かれた66の作品を取り上げるが、その分析は以下のように行われた。

まず①作品中から「金沢」あるいはその場所を特定できる固有名詞（地名等）のある段落を抽出する。②場所や時間の変化に着目して、これらの段落を、その前後の段落とあわせてひと続きのものとしてみるか、あるいは別のものとしてみるかを判断する。ここで得られた段落の集合を、本稿では以下「場面」と呼ぶことにする。次に、③池田・大貝（1993；1994）を参考に、ここで得られた段落を名詞句に分割する。詞とは、池田・大貝（1993，p.588）によれば、「断句の成分であって、自己だけの力で観念を表すもの」である。すなわち「詞」は、文を意味によって分解した単位であり、そのため名詞句は、修飾語などの単語が複合したかたちであられる。最後にここで得られた名詞句を、どの場所から見たものであるか（視点場）、どの場所に対してのものであるか（対象場）をそれぞれ判断し、視点場・対象場ごとにふりわけられる。

本稿は、こうして得られた名詞句の語をカウントするという方法をとることとする。この方法を採用

したのは、作業を簡略化することでできるだけ多くの作品の分析を可能にするためであることと同時に、分析の再現性をえるためでもある。

## III. 文学作品からみた「金沢」

### （1）場所の出現頻度

まずはじめに、金沢はその内部のどのような部分が場所として認識されているかについて述べたい。そのために、どのような場所が描写の対象として、書き手によって選好されたかを時代ごとにみることにする。

第1表に示した通り、作品番号1『義血侠血』（泉鏡花）が1894年に発表されているが、これが金沢を物語の舞台とした小説のなかでは確認されるもっとも古いものである。便宜上、この年から1920年までの15年間をはじめに、以降20年ごとに時代を設定し、それらの時代区分に含まれる作品群の中で描かれた場所の出現数を、ここでは場面数<sup>3)</sup>でみることにする。各時代区分ごとに出現する場所の場面数をカウントし、地図上にあらわしたものが第1図である<sup>4)</sup>。

こうして時代区分別に場所の出現数をあらわしてみると、時代が下がるにつれて出現してくる金沢内部の場所の数や金沢での総場面数が多くなっていくことがわかる。これは、古い作品はごく限定された場所で物語が完結し、近年の作品では金沢内部の様々な場所で物語が展開していく傾向にあるという、いわば小説そのものの性格の変化をあらわしているといえる。とみることはできるが、そのとき、どのような場所がどのように拡大していくのかについて述べたい。

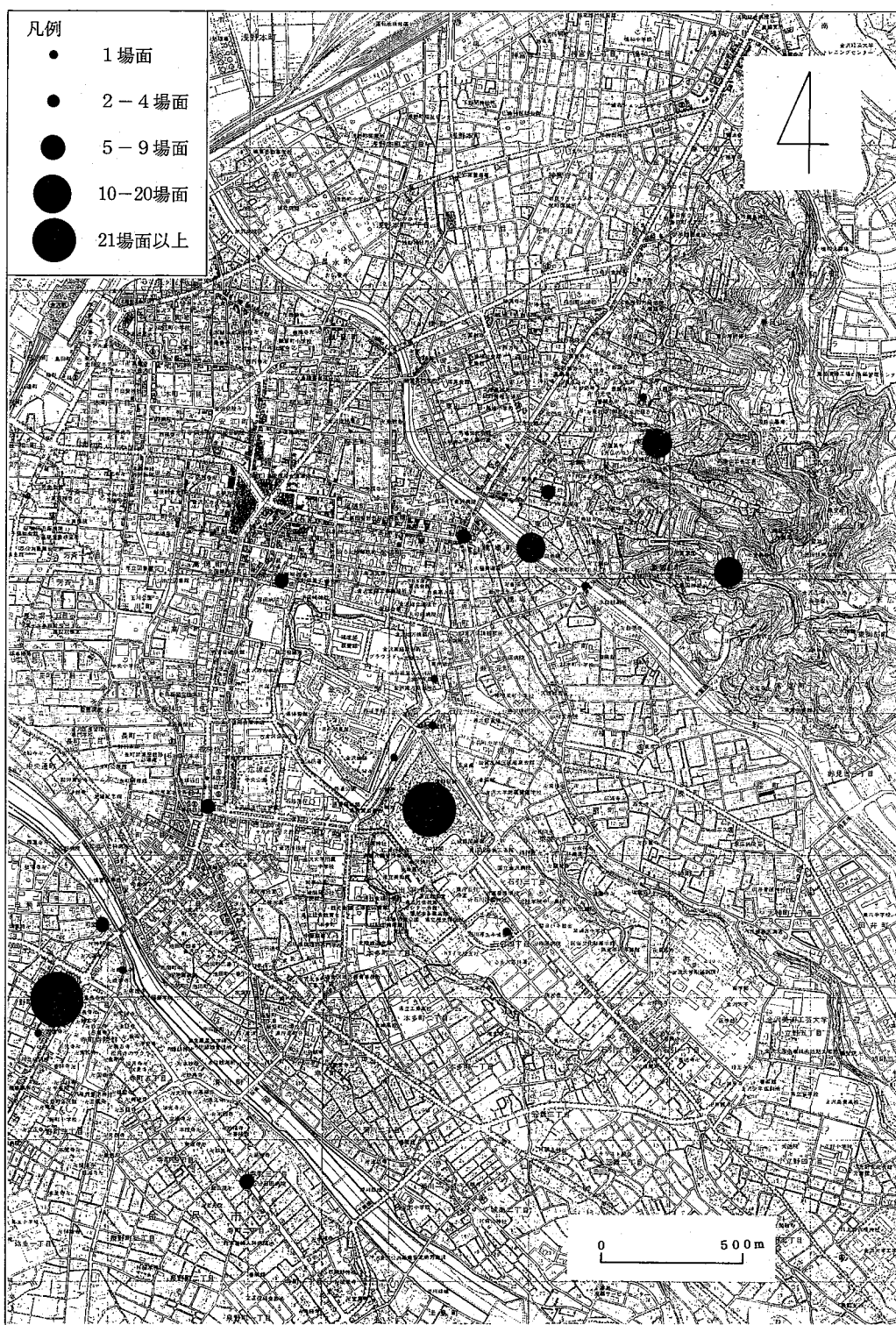
まず、1920年以前の作品では、それぞれの場所の近接性からみて、浅野川・卯辰山を中心とする場所群、金沢城址周辺の場所群、犀川を中心とする場所群の、主に3つの場所群を見て取ることができる。それ以降、時代が下がるにつれて、これらの場所群を中心として、それぞれその周辺へと出現する場所

第1表 分析対象となる文学作品(小説)一覧

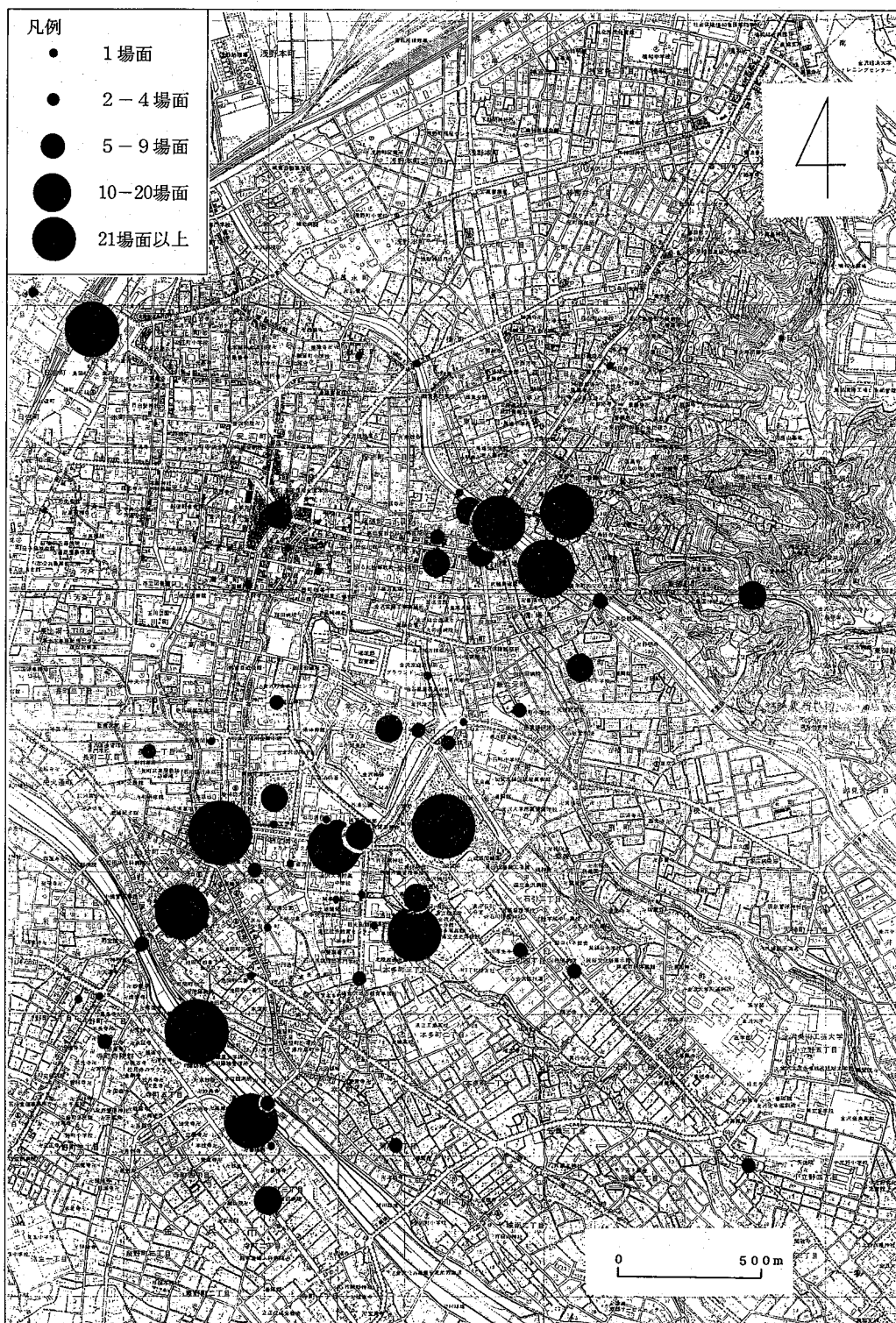
(著書五十音順)

番号	タイトル	著者名	発表年	出典
1	義血侠血	泉鏡花	1894. 11	『鏡花全集巻一』岩波書店, 1942年, pp. 415-488
2	鐘声夜半録	泉鏡花	1895. 07	『鏡花全集巻二』岩波書店, 1942年, pp. 35-55
3	三之巻	泉鏡花	1896. 08	『鏡花全集巻二』岩波書店, 1942年, pp. 386-404
4	照葉狂言	泉鏡花	1896. 12	『鏡花全集巻二』岩波書店, 1942年, pp. 532-652
5	化鳥	泉鏡花	1897. 04	『鏡花全集巻三』岩波書店, 1941年, pp. 113-149
6	ささ蟹	泉鏡花	1897. 05	『鏡花全集巻三』岩波書店, 1941年, pp. 179-205
7	髭題目	泉鏡花	1897. 12	『鏡花全集巻三』岩波書店, 1941年, pp. 443-533
8	鶯花径	泉鏡花	1898. 01	『鏡花全集巻三』エムティ出版, 1994年, pp. 295-327
9	名媛記	泉鏡花	1900. 01	『鏡花全集巻三』エムティ出版, 1994年, pp. 723-731
10	夫人利生記	泉鏡花	1924. 07	『鏡花全集巻十三』エムティ出版, 1994年, pp. 629-649
11	卵塔場の天女	泉鏡花	1927. 04	『鏡花小説・戯曲選第七巻』岩波書店, 1981年, pp. 354-456
12	縹紅新草	泉鏡花	1939. 07	『鏡花小説・戯曲選第十巻』岩波書店, 1982年, pp. 450-503
13	朱鷺の墓	五木寛之	1969-78	『朱鷺の墓 上・中・下』新潮文庫, 1982年
14	聖者が街へやってきた	五木寛之	1970	『石川近代文学全集10』石川近代文学館, 1987年, pp. 323-352
15	浅の川暮色	五木寛之	1971	『浅の川暮色』文春文庫, 1985年, pp. 8-47
16	小立野刑務所裏	五木寛之	1978	『浅の川暮色』文春文庫, 1985年, pp. 257-272
17	風花のひと	五木寛之	1979	『風花のひと』講談社文庫, 1983年
18	金沢望郷歌	五木寛之	1986-88	『金沢望郷歌』文春文庫, 1992年
19	ステッセルのピアノ	五木寛之	1993	『ステッセルのピアノ』文藝春秋社, 1993年
20	川の話	井上靖	1955	『あすなろ物語』旺文社文庫, 1966年, pp. 200-225
21	北の海	井上靖	1968-69	『北の海』中央公論社, 1975年
22	金沢殺人事件	内田康夫	1989	『金沢殺人事件』祥伝社, 1993年
23	加賀金沢殺人事件	木谷恭介	1989	『加賀金沢殺人事件』双葉社, 1989年
24	金沢能登殺人事件	斎藤栄	1989	『金沢能登殺人事件』徳間文庫, 1994年
25	地上第一部	島田清次郎	1919	『地上』季節社, 1990年
26	能登	杉森久英	1981-84	『能登』集英社, 1984年
27	黎明	曾野綾子	1955	『黎明』角川文庫, 1971年
28	名もなき道を	高橋治	1988	『名もなき道を 上・下』講談社文庫, 1991年
29	雪のドレス	高橋三千綱	1992	『雪のドレス』光文社文庫, 1994年
30	暗い町(古洞画)	徳田秋声	1912	『石川近代文学全集2』石川近代文学館, 1991年, pp. 390-397
31	挿話	徳田秋声	1924	『石川近代文学全集2』石川近代文学館, 1991年, pp. 480-503
32	町の踊り場	徳田秋声	1933	『昭和文学全集11徳田秋声集』角川書店, 1953年, pp. 381-386
33	光を追うて	徳田秋声	1938	『昭和文学全集11徳田秋声集』角川書店, 1953年, pp. 215-300
34	歌のわかれ	中野重治	1939	『日本文学全集42中野重治』集英社, 1969年, pp. 82-154
35	金澤の思い出	中原中也	1936	『中原中也全集第3巻』角川書店, 1967年, pp. 377-380
36	雪の下で蟹	古井由吉	1969	『石川近代文学全集10』石川近代文学館, 1987年, pp. 447-467
37	踊り場参り	古井由吉	1985	『石川近代文学全集10』石川近代文学館, 1987年, pp. 480-492
38	長い町の眠り	古井由吉	1987	『石川近代文学全集10』石川近代文学館, 1987年, pp. 498-513
39	ゼロの焦点	松本清張	1959	『ゼロの焦点』新潮文庫, 1971年
40	美しい星	三島由紀夫	1962	『美しい星』新潮文庫, 1967年
41	雪の喪章	水戸光子	1959	『雪の喪章』東都書房, 1959年
42	おんいのち	水戸光子	1966	『双つの顔』北国出版社, 1983年, pp. 45-72
43	幼年時代	室生犀星	1919	『或る少女の死まで』岩波文庫, 1952年, pp. 7-64
44	性に目覚める頃	室生犀星	1919	『性に目覚める頃』新潮文庫, 1957年, pp. 8-82
45	涅槃会	室生犀星	1921	『室生犀星全集第四巻』新潮社, 1965年
46	故郷を辞す	室生犀星	1925	『加賀金沢／故郷を辞す』講談社学芸文庫, 1993年
47	野田山	室生犀星	1926	『室生犀星全集第五巻』非凡閣, 1937年, pp. 219-230
48	杏っ子	室生犀星	1956-57	『杏っ子』新潮文庫, 1962年
49	加賀金沢	室生犀星	1959	『加賀金沢／故郷を辞す』講談社学芸文庫, 1993年
50	北窓ひらく	森山啓	1939	『石川近代文学全集9』石川近代文学館, 1988年, pp. 16-69
51	美しいもの・醜いもの	森山啓	1949	『石川近代文学全集9』石川近代文学館, 1988年, pp. 100-132
52	金沢・名菓の老舗殺人事件	矢島誠	1992	『金沢・名菓の老舗殺人事件』勁文社, 1992年
53	京都・金沢殺人事件	山村美紗	1991-92	『京都・金沢殺人事件』実業之日本社, 1992年
54	金沢	吉田健一	1973	『金沢』講談社学芸文庫, 1990年, pp. 9-192
55	金沢W坂殺人事件	吉村達也	1993	『金沢W坂殺人事件』光文社, 1993年
56	影と陰	武田康宏	1991. 12	北陸文学52号, pp. 81-112
57	汝が一人	大西孝	1991. 05	北陸文学51号, pp. 71-109
58	薫製の街	青田二三夫	1984. 05	北陸文学44号, pp. 61-76
59	お化け屋敷	森松和風	1993. 11	雪嶺文学10号, pp. 10-17
60	天窓のある家	小網春美	1990. 08	北陸文学50号, pp. 45-55
61	杏子の行方	小網春美	1993. 04	北陸文学54号, pp. 2-44
62	泥濘ぬかるみ	山本頤樹	1986	北陸文学46号, pp. 24-75
63	網かけ	五木松昌平	1993. 04	北陸文学54号, pp. 132-180
64	梅の木桃の木(4)	井上雪	1993. 11	雪嶺文学10号, pp. 96-104
65	下町の磔	井上雪	1989. 07	雪嶺文学1号, pp. 70-124
66	桜忌	たちりえ	1989. 09	北陸文学49号, pp. 47-53

(各全集年譜・巻末解説等を参考に作成／作品番号56～66は同人誌)



第1-1図 1920年以前における場所の出現数（但し視点場の場面数）



第1-2図 1981年以降における場所の出現数（但し視点場の場面数）

が拡大していく傾向がみられる。また同時に、1920年以前にあらわれる場所の出現数そのものも、時代が下がるにつれ多くなっていく。しかし、その拡大の仕方には、それぞれの場所群での違いがみてとれる。

浅野川・卯辰山を中心とする場所群は、1920年以前にあらわれる場所の出現数そのものは、時代が下がり（総場面出現数が増加しても）それほど変化していない（浅野川・卯辰山・天神橋）。むしろ出現数が多くなっていく部分は橋場を中心とした部分で、浅野川大橋・主計町は、戦後急速に出現がとくに多くなり、1981年以降になるとそれが尾張町にまで広がり、武蔵ヶ辻を中心とした場所群にまで伸びていく。1920年以前の作品のうちこの場所群を描いている作品は泉鏡花の作品に多いが、それは彼がこの場所群に近い下新町に生まれ育ったためと思われる。鏡花は、この場所群の中に育ったためにここを描いたのか、あるいはこの付近は、すでに当時（もしくは当時以前）から、特別な場所としての意味があったために彼はそこを舞台にしたのかは不明だが<sup>5)</sup>、しかし彼によって描かれたこの場所群が、彼の死後もそのまま継続してそれ以降の書き手によっても描かれてきたことは興味深い<sup>6)</sup>。

次に金沢城址を中心とする場所群をみたい。この界限は、金沢城址（1897年～1945年師団司令部、戦後～1994年大学が置かれた）を中心とした官庁街であるため、この場所群が描かれたことは、浅野川周辺や後述する犀川周辺のように、作者の個人的な体験（そこに生まれ育ったこと等）によって描かれたのだとは考えにくい。1920年以前において、すでに多くの場面出現数を数える兼六園など、ここが描かれるべき特別な場所であったことが推測できる。金沢城址そのものは、戦前一般市民は入場できなかったと考えられるため、とくに場面として登場するのは戦後になってからだが、1921～1940年に出現する広坂や香林坊が、1981年以降にはもっとも出現数の

大きな場所へと成長していく様がみてとれる。さらにこれらの場所が、あたかも、一方は国道157号線に沿って、武蔵ヶ辻の方角へ、もう一方は、片町－犀川大橋への方向へと伸びているようにみえることがわかる。

最後に犀川を中心とする場所群をみる。この場所群も、1920年以前の主な書き手として、室生犀星・島田清次郎を挙げることができる。犀星は、雨宝院に養子として育ち、また島田は西の廓で置屋を経営していた祖父のもとで、少年時代を過ごしている。したがって、1920年の雨宝院・西の廓、またそのすぐ近くを流れる犀川の出現は、個人的な体験によるところと考えることもできるが、浅野川の鏡花の場合と同様、たとえ個人的体験による描写の場所の選択がここでなされたのだとしても、その後も継続して現在にいたるまで選択され続けてきたことがみてとれる。また、浅野川・卯辰山を中心とする場所群の出現数が、橋場を中心とした新たな場所群を生み出したことと同様に、ここでも桜橋・W坂・寺町といった新たな場所が出現している。浅野川・卯辰山を中心とする場所群との差異は、場所の総場面数が時代がさがるにつれ増大しているにもかかわらず、浅野川を含めそれらの場所の出現数がそれほど増えていないこととは対照的に、ここでは犀川をはじめとして、W坂など、総場面数の増加にともない出現頻度が増大していることが指摘できるだろう。したがって、浅野川・卯辰山を中心とする場所群の出現頻度をこの犀川を中心とする場所群のそれと比べたとき、時代がさがるにつれ、相対的に犀川を中心とする場所群に出現の比重がより高くなってきていると考えられる。

以上のように、1920年以前に描写された3つの場所群を起点として、それらの描写が、書き手が変わっているにもかかわらず継続して描写され、また、それらを中心に周囲に新たな場所をうみだしていることがこれらの地図から読みとることができる。

## (2) 場所のイメージ1

### — 状況をあらわす語の出現頻度 —

上述したように、描写される場所は、古い時代に描写された場所がそのまま受け継がれ、その周囲に場所が拡大・生産されていることがわかった。金沢の場合、最初に描かれたのは、浅野川・卯辰山を中心とする場所群、金沢城址を中心とする場所群、犀川を中心とする場所群の三つの場所群であるが、これらの場所群にどのようなイメージが付与されてきたのかをみることにしたい。

このとき、いわゆる「イメージ」というものをどのようにここで認定していくのかということが問題にされなければならない。書き手が描いた場所についてのそれらを、何を手がかりに断じていけばよいのか様々な方法が考えられるが、ここではまず、それぞれの場所がどのような状況に置かれ設定されているのかという、いわばその場所の状況設定をみることにする。文学作品の中でそれらの場所が登場するとき、どのような場所としてその場所が設定上置かれているかを検討することは、場所のイメージを知る上で有効な手がかりになると考えられるからである。

具体的な方法として、場所の状況をあらわすと考えられる「語」を、それぞれの場所についてあらわれた名詞句のなかからカウントしていく方法を試みる。場所の状況をあらわす語と考えられるものとして、i) 時刻；その場所はどのような時間帯にあらわれるか、ii) 天気；その場所が描かれているときの天気は何か、iii) 季節；設定上のその場所の季節は何か、が考えられる。

ところが場所が登場する場面場面でのそれらの時刻・天気・季節を、「語」について断定していくとき、必ずしも、それらすべてが場面場面でカウントされとは限らない。したがって、「語」をカウントすることは、もっとも間違いなく断定できるという利点がある反面、文脈の関係等から暗黙のうちにそれぞ

れがすでに読み手にくみ取れる場合を見落とすという欠点がある。したがって、以下の検討は、そうした限界をつねにはらんだものであることを忘れてはならない。

### i) 時刻

時刻をあらわす語と考えられるいくつかの語を設定しそのカウントを経たのち、これらの時刻をあらわす語が、場所のそれぞれについていくつカウントできたかを地図上にプロットした。以下その結果を、時代ごとに見ていきたい<sup>7)</sup>。

1920年以前の作品では、一見して全体的に「夕方一夜」にかけての時間帯に設定される。この時代では、「朝一日中」の状況設定がなされているのは犀川のみである。また、橋場を中心とした場所群（橋場・尾張町・下新町）に昼夜平均して「語」が出現することにも留意すべきであろう。1921-1940年・1941-1960年については、語の出現数がきわめて少ないが、犀川が昼夜平均となり、卯辰山が「朝一日中」へと逆転している。またこの時期に登場するようになった金沢駅の設定時刻も「朝一日中」に偏っている。1961-1980年になって、犀川もまた夜をあらわす語の出現頻度が多くなるという逆転がおり、これは1981年以降にもそのまま受け継がれていく。この頃から犀川周辺の場所（いくつかの橋やW坂・寺町）が出現するようになるが、これらも犀川の「夕方一夜」を受け継いだようなかたちで、「夕方一夜」をあらわす語が頻出している<sup>8)</sup>。反対に、浅野川・卯辰山を中心とする場所群は、1921年以前にすでにあらわれた「夕方一夜」をあらわす語が、そのままの形で近年にまで受け継がれてきたとみることができ。しかし、それもまた1981年以降に変化がみられることもまた指摘できる。さらに金沢城址周辺は、ほぼ1921年以前の「夕方一夜」が、1981年以降まで受け継がれてきていることがみてとれるが、この頃登場する香林坊が、最初「夕方一夜」に設定され、1981年以降「夕方一夜」の場所として定着したこと



が推測できる。

## ii) 天気

同様に天気をあらわす語の出現頻度についてみていきたい。

1920年以前の浅野川・卯辰山を中心とする場所群には「晴れ」をあらわす語が頻出するが、1921年以降それが逆転し、現在にいたるまで、晴れ以外、すなわち、くもり・雨・雪・あられなど、「ぐずついた天気」の中にこの場所群は置かれ続ける。犀川を中心とする界限は、1940年以前「晴れ」と「晴れ以外」がほぼ同数あらわれているのに対し、1941年以降現在にいたるまで「晴れ」の出現が目立って多くなる。金沢城址周辺の場所群は、時代を問わずぐずついた天気の中に置かれ続けている傾向にある。時代ごとの天気の総語数でみると、1920年以前には圧倒的に「晴れ」が多いが、時代を経て現在に近くなってくるにつれ、ぐずついた天気が圧倒する。これは浅野川・卯辰山を中心とする場所群の変化の仕方とほぼ一致するが、これと逆の変化をした犀川、また変化のみられない金沢城址周辺の変化の仕方は注目に値する。

## iii) 季節

場所の状況設定をあらわす語として、最後に季節をみてみたい。季節は時代を通してそれほど変化するものと考えにくい。したがって、全時代の合計で春と冬の出現が多いことは、金沢に「春」と「冬」のイメージが大きく付与されていることがいえる。季節におけるそれぞれ場所の時代変化をみると、カウントされた語数がきわめて稀少であるため判断されにくい。1921年から80年にかけて、浅野川・卯辰山を中心とする場所群には「夏」の出現がきわめて少ないこと、相対的にこの時期犀川周辺には「夏」がより多く出現すること、また1960年以降出現するようになる香林坊を中心とする地区に、現代まで「秋」が多くみられることが指摘できる。また1981年以降になって、浅野川・卯辰山を中心とする

場所群に「夏」が出現することも、大きな変化としてあげられる。

## (3) 場所のイメージ2

### — 場所の雰囲気をあらわす語の出現頻度 —

前節では、場所の状況をあらわす語として、i) 時刻、ii) 天気、iii) 季節について、それぞれの場所の時代変化を見てきた。場所の状況をあらわすこれらの語以外にも、場所のイメージをあらわすと考えられる語がいくつかある。そのうち、イ) 静・騒をあらわす語、ロ) 明・暗をあらわす語、ハ) 寒・暖をあらわす語、ニ) 新・古をあらわす語を、場所の雰囲気をあらわす語と設定し、それぞれの語について場所ごとにカウントを行った。本節では、雰囲気をあらわすと考えられるこれらの語について検討する。

### イ) 静・騒をあらわす語

1920年以前の地図上にあらわれる静・騒をあらわす語は、どの場所も静をあらわす語が数多くカウントされた。殊に浅野川・卯辰山を中心とする場所群、金沢城址周辺の場所群、犀川を中心とする場所群にそれがみられる。騒をあらわす語はわずかに兼六園、尾張町でみられる程度である。1921-1940年、1941-1960年は語数そのものがきわめて少ないため断定することは危険だが、これらの時代にあらわれる広坂-香林坊で、騒をあらわす語が多くカウントされるようになる。また、この2つの時代にわたって、兼六園で静をあらわす語が多く出現するようになったことも変化としてみとめられる。1961年以降も、香林坊で騒をあらわす語が頻出することには変わりはないが、1981年以降、香林坊の近隣である片町や中央公園・旧四高などにも騒をあらわす語が出現しているのは、まるで香林坊にみられた騒の語が周囲に拡散し、騒がしい香林坊のイメージが強化されているようにみうけられる。さらに浅野川・卯辰山を中心とする場所群では、1941-1960年に浅野川で



騒をあらわす語がみられるものの、原則的に1920年以前にみられたこれらの境界の静をあらわす語が、そのまま現在にいたるまでうけつがれているとみることができる。しかし、1961-1980年になってあらわれる浅野川大橋や、1981年以降の橋場を中心とする新しい場所の集まりには、騒が目立ってみられること、また犀川も1981年以降騒をあらわす語が頻出するようになったことなどの変化がある。

#### ロ) 明・暗をあらわす語

1921年以前の明・暗は、西の廓や兼六園に明と暗が同程度みられるのを例外として、どの場所でも暗をあらわす語が卓越する。1921-1940年に広坂・市役所で明をあらわす語がみられ、犀川でも明をあらわす語がみとめられるが、1960年まで明・暗をあらわす語の出現がきわめて少ない。1961-1980年になると、浅野川・卯辰山・東の廓で、双方同程度あらわれるを含め、天神橋の明の出現をあわせると、浅野川・卯辰山を中心とする場所群で、明をあらわす語の出現が目立ち始める。反対に犀川では、依然として、暗をあらわす語が継続してあらわれているようにみえる。尾山神社で明をあらわす語が数えられることもあげておきたい。これは1981年以降の香林坊の明をあらわす語の出現に連なるものと考えられるからである。また1981年以降では、兼六園・金沢城址で明をあらわす語がみとめられること、犀川で明をあらわす語が頻出していること、浅野川・卯辰山を中心とする場所群が、橋場を中心とした明、浅野川・卯辰山の暗と区別されることなどが指摘できる。

#### ハ) 寒・暖をあらわす語

寒暖をあらわす語については、時代を通して出現数が極めて少ない。また時代を通して、どの時代も、主に寒さをあらわす語が出現することがみとめられる。

#### ニ) 新・古をあらわす語

新・古をあらわす語についても、出現数はきわめ

て少ない。しかし、これらの語が出現する場所には、頻繁に出現している。1921年以前には、下新町・西の廓に古をあらわす語が、犀川には新をあらわす語がそれぞれみられるにすぎず、1921-1940年にも、主計町・県庁・小立野で、それぞれ古をあらわす語がみられる程度である。しかし、1961年以降になると、古をあらわす語が、主計町・犀川で目立ちはじめ、1981年以降になると、浅野川・浅野川大橋・主計町・尾張町に、古をあらわす語が頻出するようになる。また、香林坊・県庁・広坂・片町では、新をあらわす語がかたまつてあらわれてくる。

#### (4) 名詞からみた場所のイメージ

最後に、抽出された名詞句のうち、まだ扱っていない語である名詞にも着目して、それぞれの時代の場所のイメージの変化についてまとめておく。

第2表は、Ⅱ章で述べた方法で抽出された名詞句について、前節までに扱ってきた語(形容詞・形容動詞も含む)を除いた「名詞」を抽出・カウントし、それぞれ時代・場所ごとにまとめたものである。表の語は出現数の高いものの順に並んでいるが、これらの名詞を場所を代表するキーワードととらえることで、それらは場所のイメージを構成するものと考えることができる。

これを見ると、これらイメージを構成するものは、それぞれの場所に時代を経てもほぼ継続してみられることがわかる。例外として、浅野川では1960年まであらわれる「柳」(または「柳並木」)が1961年以降あらわれなくなり、また1940年までは「夜店」や「露店」があらわれるが、それ以降は登場していない。また犀川でも、「瀬」という名詞が時代とともに出現しなくなっている。しかしながら1981年以降、浅野川に「泉鏡花」や「滝の白糸の碑」<sup>9)</sup>という語が出現し、また犀川でも「室生犀星」が多くみられるようになる。これは、この時代これらの場所が両者の作品を通じてイメージされていることが推測され、

第2表 文学作品からみた各時代区分における場所のキーワード

[illegible]

	1920年以前	1921-1940年	1941-1960年	1961-1980年	1981年以降
浅野川・卯辰山界限	晴れ 夜 春・冬 静・暗	→ ぐずついた天気 → 夜 → 春・冬・秋 → 静・暗	→ → → 春・冬 → 静 明	→ ぐずついた天気 → 夜 → 春・冬 → 静・暗・寒 橋場・尾張町界限 → 騒・明	→ ぐずついた天気 → 夜昼 → 夏 騒・明 晴れ
金沢城址・兼六園界限	ぐずついた天気 夜 春夏秋冬 騒 暗	→ ぐずついた天気 → 夜 → 春 → 静 → 暗 → 明	→ ぐずついた天気 → → 冬 → 静 → 騒	→ ぐずついた天気 → 昼 → 春夏秋冬 香林坊・片町界限 → 騒・明	→ ぐずついた天気 → 昼 夜 騒・明・新
犀川界限	晴れ・ぐずついた天気 夜 春夏秋冬 静 暗	→ 晴れ・ぐずついた天気 → 夜昼 → 春 → 静 → 暗	→ 晴れ → 夜 → 夏・冬 → →	→ 晴れ → 夜 → 春・冬 → 静・寒 → 暗	→ 晴れ・ぐずついた天気 → 夜 → 春 → 静 → 明

第2図 文学作品からみた各時代区分における場所のイメージ

ここでもイメージが存続しているのだとみるべきであらう。

卯辰山や卯辰山寺院群での坂・石段・階段等の存続、西の廓・東の廓の廓を想起させる語など、浅野川・卯辰山界限、犀川を中心とした界限には、描かれるモノを通してみたイメージの存続がうかがえる。香林坊をみると、KOHRIINBO 109 など1981年に降に出現するものもみられるが、盛り場としてのイメージは時代を通して存続してきたことがわかる。

しかし、描写されるモノが時代とともに変化しているとは考えられない場所もある。まず第一にそれは兼六園である。1960年まで、ここで描写されてきたモノは、樹木や茶店・茶屋が主であった。回遊式庭園として水を想起させるもの（噴水や池・滝など）は時代をこえて変わらずイメージされてきたが、1961年になって雪吊りが、また1981年には微軫燈籠がはじめてあらわれる。寺町についても同様に、それまで料亭（料理屋・料亭・鰯甚<sup>10)</sup>）がもっとも多くみてとれるが、1941-1960年にあらわれた寺が、1981年以降頻繁に出現するようになり、それと同時期にそれと隣接するW坂が場所としてよくあらわれるようになっている。尾山神社もまた、1961-1980

年にはじめてあらわれるが、神門を中心に注目されはじめ、長町もまた、単なる住宅地・屋敷町であったところが、1961年には武家屋敷としてみられるようになっていく。

#### IV. おわりに

以上みてきた金沢の場所のイメージは、おおよそ以下のようにまとめられる。

1920年以前、泉鏡花・室生犀星の作品を中心とする、本稿で扱っているもっとも古い時代の小説にみられる金沢は以下のように描かれる。まず、出現する場所は、浅野川・卯辰山を中心とする場所群、金沢城址・兼六園を中心とする場所群、犀川を中心とする場所群の3つに大きく分けることができる。ここでは、浅野川・卯辰山を中心とする場所群で「晴れ」のイメージが、金沢城址を中心とする場所群で「ぐずついた天気」、犀川を中心とする場所群でその双方が同程度にあらわれるという天気についてのイメージの違いがある。また、犀川で昼のイメージが付与されている反面、その他2つの場所群では夜のイメージが付与されていること、季節についても、浅野川・卯辰山を中心とする場所群で春と冬が特に

あらわれるが、その他の場所群では春夏秋冬がほぼ等しくあらわれるという違いなど、イメージの上でもこれらの3つの場所群は、ひとつのまとまった場所の集合体としてみてとることができるだろう。したがってこれらの場所群はほぼ同質の場所のあつまりとして設定できると考え、それぞれを浅野川・卯辰山界限、金沢城址・兼六園界限、犀川界限と呼びたい。第2図に示されるように、これらの界限は、時代が変化し当然作者が変わっていても、原則的に、これらのイメージが受け継がれていることが見てとれる。浅野川・卯辰山界限は、1921年以降ぐずついた天気の中におかれ、夜というイメージが付与され、また、春・冬が継続してあらわれる。また金沢城址・兼六園界限では、ぐずついた天気の中におかれ続け、犀川界限では、天気は双方がほぼ同程度にあらわれ、夜という時刻に静かな場所として描かれている。

これらのイメージは、1921-1940年の時代区分の中にすでにあらわれ、それ以降ほぼ定着していることがみてとれるが、イメージからみると、1961-1980年に新たな場所として分類すべき場所の集合が出現する。それは、浅野川・卯辰山界限に近い橋場を中心とする場所群と、金沢城址・兼六園界限に近い片町・香林坊である。これらの場所は、それ以前の近隣の場所のイメージを受け継がず、全く異なる場所のイメージをもって出現し、場面数でみてもこの時代以降急速に出現するようになった場所である。橋場を中心とする場所群は、賑やかで明るくまた晴れの頻出する場所であり、また片町・香林坊・広坂は賑やかで明るく夜にくずついた天気の中におかれる場所である。これらの場所イメージは1961年に出現し定着している。したがって、金沢の場所は1961年を前後してこれら2つの界限（それぞれ、橋場・尾張町界限、香林坊・片町界限と呼ぶ）をあわせた5つのイメージ上の界限をもって、形作られているといえるだろう。

以上みてきた場所のイメージの変化により、イメージは、原則的に、定着したものがその後も存続しているが、そのイメージが変化する場合、時代は1961年を前後してのものであること、また描かれたモノをたどっていくと、そのイメージをかたちづくと考えられるそれらのモノも、1961年以降にその変化がみられると考えることができるだろう。

本稿は、景観行政という都市の独自性を守ろうとする政策が進行していく中で、その独自性とは具体的にどのようなものであるのかを、場所イメージを中心に検討してきた。本稿では、文学作品にあらわれる場所の状況設定と雰囲気であらわす語・場所を構成するキーワードとなるものを明らかにしたにすぎないため、その問いに十分答えることができたとはいえないが、5つの異なる界限が金沢のイメージにあらわれたことは、金沢の独自性がこうした界限によって構成されていることを示すものと思われる。そのため、ここにあらわれた界限それぞれのイメージに即したまちづくりが、金沢の独自性を守ることにつながるのではあるまいかと考えることができる。

しかしながら、さらにこれらのイメージがどのようにかたちづくられてきたのかが検討されなければならない。なぜなら、景観行政において都市の独自性を守ることの意味が問われなければならないからである。本稿で扱った文学作品においても、描写主体である著者の立場によって、その描写が微妙に異なることは明らかであるし、またそれらのイメージが、金沢の都市環境の変化にともなってどのように変化してきたかもみておく必要がある。このことによって、金沢の独自性というものがどのようにかたちづくられてきたか、あるいは「独自性」とはいかなるものであるのか理解するための手がかりをえることができるだろう。これらの問題については、別稿で検討してみたい。

## 謝 辞

本稿は、1996年1月、金沢大学大学院文学研究科に提出された修士論文の一部を加筆・修正したものである。修士論文作成にあたり、川崎茂先生をはじめ金沢大学地理学教室の諸先生には多くの御助言・御指導をいただきました。厚く御礼申し上げます。

## 注

- 1) 例えば、建築・まちなみ景観研究会ほか(1994, p.177)によると、全国地方自治体のうち、景観行政の制度・要綱等をもつものの数は、1990年2月現在で148にも及んでいる。
- 2) 一例をあげると、1972年に表面化したS旅館建設をきっかけとした建造物の色彩論争や、1982年浅野川河岸のマンション建設にともなう住民運動(主に建造物の高さがここで争点となった)が挙げられる。これらの動きは、経済界を中心とする「都市美文化賞」の設立(1978年一)や景観トラスト運動への発展などといった住民運動へと展開した。
- 3) ここでカウントされた場面数は、Ⅱ章で述べた視点場によるものである。したがって、登場人物(もしくは語り手)が、その場所にいる場面数がここで示される。
- 4) 本稿では頁数の都合により、1920年以前の地図と1981年以降の地図のみを掲載した。また本文中で作図した他の地図についても、同様の理由で今回は掲載していない。
- 5) これを明らかにするためには、近代以前、すなわち金沢の場合鏡花以前の場所を明らかにする必要があるが、資料等の制約もあり本稿では考察しない。
- 6) この場所群近辺に居住経験のある作者は、この後ほとんどみられず、したがって本稿で考察するスケールの場所は、作者の居住地等の個人的経験にはあまり左右されないといえる。

- 7) ここで作図された地図では、それぞれの場所においてカウントされた語のうち、「夕方ー夜」「朝ー日中」の一方が75語以上を占めるもののみ、「夕方ー夜」もしくは「朝ー日中」の色分けをほどこしている。語数の表示は、色分けされた語の数のみを示し、75語以下のものについては、双方の合計数をあらわしている。これは次節以下、天気・雰囲気についても同様で、75語を判断の基準にしている。
- 8) 作品中には、ある場所が単独で登場する場合と、登場人物が移動することによって、場所が連続してあらわれる場合とがある。したがって、夜の犀川から寺町へ移動すれば、双方が夜であるため、本文のように犀川とその周辺が同じ時刻になっていると考えられないこともない。しかし、本稿のように「語」をカウントする場合、最初に犀川で設定された時刻が再び寺町で説明されることは少ない。そのため犀川と寺町は、それぞれ別の場面で設定された時刻がカウントされる筈であり、場所が連続してあらわれたため同時刻となったとは考えにくい。
- 9) 滝の白糸は、作品番号1『義血侠血』の主人公で、現在浅野川左岸の天神橋ー浅野川大橋付近に碑が建立されている。またこの碑が立つ浅野川左岸の道路を「鏡花のみち」と呼び、1989年「金沢市歩ける道筋整備事業」の一環として、「鏡花のみち修景整備工事」が、金沢市土木部みち筋課によって施された。
- 10) 「鰐甚」は寺町5-1-8所在の老舗の料亭の名である。

## 文 献

- 青山宏夫(1985):文学からみた「場所のイメージ」  
一宮沢賢治『グスコーブドリの伝記』を例にして一。  
理論地理学ノート, No.4.
- 内田順文(1989):軽井沢における「高級避暑地・別荘地」のイメージ定着について。地理学評論62

- (A) -7.
- 香西克彦(1994)：芭蕉の風景―『幻住庵記』にみる風景の構造―。日本建築学会計画系論文報告集 第455。
- 建築・まちなみ景観研究会著・建設省住宅局建築指導課・建設省住宅局市街地建築課監修・財団法人建築技術教育普及センター・財団法人全国市街地再開発協会編(1994)『建築・まちなみ景観の創造』技報堂。
- 小林 亨(1984)：雨の風景に関する基礎的研究―和歌・俳句・浮世絵に見られる雨景表現の分析を通して―。日本都市計画学会研究論文集19。
- 小林 亨(1988)：音響景観の把握と鑑賞に関する基礎的研究―和歌・俳句の分析を手がかりとして―。都市計画学会学術研究論文集23。
- 杉浦芳夫(1992)：『文学のなかの地理空間―東京とその近傍―』古今書院。
- 福田珠己(1991)：場所の経験：林芙美子『放浪記』を中心として。人文地理43 (3)。
- 若山 滋(1990)：『源氏物語』における建築空間。日本建築学会計画系論文報告集第408号。
- 池田朋子・大貝 彰(1993)：文学作品中の空間描写にみる都市景観に関する研究―高山のケーススタディー。日本都市計画学会学術論文集28。
- 池田朋子・大貝 彰(1994)：高山の地方文学賞受賞作品に書かれた都市景観に関する研究―文レベルの分析を通じて―。日本都市計画学会学術研究 論文集29。
- 池田朋子・紺野 昭(1993)：文学作品中の空間描写から都市・地域景観を読み取る方法に関する研究―小説『城のある町にて』をケーススタディとして―。日本建築学会計画系論文報告集第450号。
- 黒岩俊介・前川道郎(1990 a)：鐘塔体験―ブルーストの『失われた時を求めて』に見る建築体験の諸相。日本建築学会計画系論文報告集第409号。
- 黒岩俊介・前川道郎(1990 b)：建築体験の諸相―ブルーストの『失われた時を求めて』におけるサンティレール教会堂の鐘塔の場合。日本建築学会計画系論文報告集第417号。
- 中村和宏・川上光彦(1994)：金沢市における条例に基づく景観行政施策に関する調査研究。1994年度第29回日本都市計画学会学術研究論文集。
- 若山 滋・藤原 隆(1989)：『古今和歌集』と『新古今和歌集』における建築空間。日本建築学会計画系論文報告集第405号。
- Aiken, C.S. (1977) : Faulkner's Yoknapatawpha County : Geographical Fact into Fiction. *Geographical Review*, 67.
- Aiken, C.S. (1981) : A Geographical Approach to Willam Faulkner's "The Bear". *Geographical Review*, 71.
- Alexander, D. (1986) : Dante and the Form of the Land. *Annals of the Association of American Geographers*, 76 (1) .
- Pocock, D. (1979) : The novelists image of the North. *Institute of British Geographers*, 4 (1)
- Tuan, Yi-Fu (1985) ; The landscape of Sherlock Homes. *Journal of Geography*, 84 (2).